

建國の精神 : 論文

著者	本多, 信博
雑誌名	龍南
巻	2 2 4
ページ	1 - 2 0
発行年	1933-03-02
その他の言語のタイトル	建国の精神 : 論文
URL	http://hdl.handle.net/2298/7104

建國の精神

本 多 信 博

支那は其の國民生活の各方面に於て今正に一大變革の過程にあり、革命以後の支那の特徴は政變、内亂、社會的、經濟的不安及び之が當然の結果として中央政府の權力の微弱なる事に存す、各國何れも之の情勢によりて不利を蒙り之が矯正を見るに非ずんば世界平和之に依つて脅かされ世界不景氣の因子たるべし云々。

右はリットン報告卷頭に記載されたる世界の大名文である、リットン報告一度國際聯盟に提出さるるや歐米の列強列弱口を並べ鍋をたいてその眞意を賞讃したのである。そは即ち正しく報告書そのものに同意たる以外の何者でもない事は表情そのものの雄辯に物語る所である。リットンは歐米の縮圖であり歐米はリットンの擴大圖である事も吾人の容易に解し得る所たるを疑はない。

併し乍ら今一度リットン報告の該文のみを探討して見てもそれを單なる認識不足として排除し空論に近き論辯を弄す

る事の無駄なる物として破棄し去るには餘りにも淺薄なる日本民族それ自体の認識不足と言はねばならぬ。

現代日本を双肩に擔ひ、日本民族の指導者たるの顔色を以て自稱する支配階級や、所謂新聞屋賣名家が内心の危惧を顧みる事もなく或は又單にその危惧を隠し去らんとし、該報告を單なる認識不足として意味無きが如き迷文を以て、それを正當なりと主張せし結果と、今日に於ける國際聯盟の諸國の態度とを比較し見る時に吾人は全く晏然たり得ない者である。若し該報告にして世論の傳ふる如くであるならば、然して又世人の口にする如く該報告認識不足ならば、何が故を以て松岡代表孤立の状態を覺悟したであらうか。

歐米各國代表關するも關せざるも、皆日本の主張に反對する所以の物は該報告の認識不足を認識し能はざる者と云ふべきであらうか、日本民族が、凡ゆる思索力に於て劣れりと自稱する日本民族が、之の點に就いてのみ歐米の諸國民に優れりとは斷じて申さるべきではない、新聞屋賣名家と諱名さるゝ無思想階級の諸君より歐米に於ては、その思索力に於て卓越せる者一人たりとも存在せずとは斷定されない、今日の日本の無思想屋に一目瞭然と解さるべき認識不足なら彼に於ては正しく半目瞭然たるの感ある事を吾人は敢へて疑はざる所である、彼は正に瞑目して牙劍の磨きをなしつつあると云はねばならぬ、彼が瞑目する所以のもの、而して該報告を神札と拜する所以の物は何處に存するであらうか、そは歐米の縮圖たるリットンそれ自身の言中に容易に發見し得る所である。

科學者のそれは別個の問題であるが抑々眞の公平なる觀察が存在するであらうか。

一つの國土に生を享け一つの民族であり、一つの社會に生活を營む吾等人間の間に於てすら、甲と乙との仲裁に當りてそれを己が方面に有利に解決せんとするの傾向は否定出來ないのに人種を異にし、言語風俗を異にする仲裁者が二つの者の抗爭を仲裁するに當つて、己れに有利なる者に有意的に解決せんと欲するは正しく理の當然なりと云はねばならぬ、現下物質文明の世界に於て而して經濟を以て生活原理となす世界に於ては、正義人道若しくは公平なる判斷皆己が

利害を離れて存在しない事は現實そのものが物語る所である、併らばリットン報告は歐米の利害に即したる判斷であつたであらうか、正しく然りと考へざるを得ない者である。

第二章滿洲に於てリットンはその支那の領土である事を指摘してゐる、併し乍ら東西幾百千里に亘る彼の萬里の長城は一体何をば儼然として認むる物であらうか、過去數千年前の時代に於て滿洲それ自らが支那の領土にあらざる故をまざ／＼と目前に展開し、それがいつの間にか支那の領土と化してゐたのである、それをば現時世界の民族自決に基いて獨立し、復舊の志を遂げ了つたと見る時世界の人類はその行動に於て舉手讃同すべきであらねばならぬ。併るに滿洲國の出生をば敢へて否認せんとする所以のものは一目の疑問を挾むに容易なる事である。

更に云ふ。第一章の前提として提げたる物の中に支那の無力と各方面の不安は世界平和を阻害するものであると、今まで支那の一部として見做されてゐた滿洲が之の不安より脱脚して、統一ある國家組織を形成し、獨立の形体を整へてそれを世界に公言するや、世界の輿論は囂々として反逆の論理と化して行つたのである。斯くの如く有力なる統一國家の形成に賛せずして支那の無統一を憂ふるが如き態度をなすは、一体奈邊にその行動の眼目を有するや思ふに難からざる所である。思ふて此處に到れば右手に統一を願ふが如き素振りを見せ左手に何處までも無統一を希求する彼等の心底には支那滿蒙四億半の大消費者に對する爪牙が磨かれつゝある事を吾人は深く々々察知せねばならぬ。之の爪牙の續く限り、そして生活の原理が經濟に基く限り其處には公平なる仲裁もなければ、國際平和の美名も失せ、唯自己の利害と打算による國際抗爭が存するのみである。

二

曾つての滿洲事變が遠くジュネーブに轉化した如く、現下の滿洲國獨立問題もその抱含さるゝ極東の地を離れて雲烟

萬里スイス湖畔の地に論議されつゝある。一個の些事と雖も必ずその所のみにて解決せらるゝなく互に抗争し挑戦し續け乍ら、スイスの一殿堂まで運ばれ行く姿は正しく二つ四人が、手錠を箝められて遠く拘禁所に運ばるゝと好一對である。唯吾人の不平を言はんとする所は當事國そのものをば實に二個の囚人に例へて己が手によらずんば凡ゆる解決は斷定されずとなす國際聯盟なるものゝ態度なのである。

果して國際聯盟は凡ゆる國家の經論に關して萬策の干渉をなす超民族的超國家主權的な權力存在であらうか、何らの辯明も、何らの動義をも許容し能はざる絶對主權であり得るか。

抑國際聯盟は如何にしてその成立の緒口を發見したのであるか。

過ぎし世界大戰亂に於てキリスト教國互に敵となり、或は味方となり、流血はおろか數千萬の尊き人命を塵埃の如く吹き飛ばしたる慘憺たる戰の跡を見て苟も情ある人間なる者、誰が之の慘狀の再び來るを希求する者があつたらうか。之の光景をまざ／＼と眼前に見せつけられた歐洲參戰諸國は、世界平和への憧憬を深め行き遂にはその實現にまで積極的に進まんとするのは人情の常と云はねはならぬ。かゝる結果として生じたものが即ち國際聯盟であり、參戰諸國のみの希求する一機能だつたのである。

かくて忌む可き戰禍の反動として現出したる國際聯盟はその規約たるや正しく古き戰のみに關聯し新しき戰術に對しては何らの制裁をも規定せざる傾向を濃厚に有するものである。古き戰術は所謂武器を以て人命を奪ふの類であり、新しき戰術は所謂營養不良を以て人命を縮むるの種である。現下物質文明の世界に於て行はれ得る容易なる殺戮は正しく食料そのものに外ならない。經濟的世界征服は往時の武力的世界征服とその位地を轉還してしまつたのである。抗争の精神を先祖より傳承し來れる人類は武器による抗争が終焉を告げし時、それに代るべき抗争手段を容易に發見しそれによりて己が民族の平和と安寧を希求して止まない、人間木石に非ずして情ある以上、民族的平和安寧若くば民族の優

越を願ふは自然の理と云はねばならぬ。併し乍ら之の民族的偏見と願望の存続する限り（それは未來永劫であると確信するが）凡ゆる國際主義の理想は地を拂はれざるを得ないものである、人木石に非ず、そは正しく凡ゆる國際主義に對する大なる打撃なりと云ふべし。

併して見よ平和の殿堂なりと呼ぶべきスイスの地位を、北に獨乙南に伊太利、獨乙に於けるヒットラー一味のナチス運動、伊太利に於けるムツソリーニのファツシヨ運動、將に國際平和運動は南北よりして、紅一點の挾撃を已に地位的に蒙つてゐるのである。かかる危地に直面せる國際聯盟が今日の極東に關して、超國家主義的權力を行使せんと敢試するのはその國際聯盟を利用せんとする背后的虎威に外ならないのである。架空的な言辭に過ぐるかも知れぬが歐米の強弱何れを問はず經濟的に乏しく武力的に強く、而して極東日本の武力弱くして經濟的には世界の大資本家であつたら、ジュネーブの國際聯盟はいつの昔にかその存在を失却したであらうと思ふ。要するに國際聯盟が今日尙その命脉を有するものは、軍事的に弱者なる歐米諸國が強者からの侵害を保護され、且己が經濟的征服に關しては何等の抑制をも加へざるの故を以てであらうと吾人は斯様に信する者である。

極東日本の軍國的存在が彼等の脅威を受くる對象となつた時、及ばざる自己の保護の爲にそれに對抗せんとして依存したのが聯盟であり、且それに依存する事によつて他の殺戮を企圖しつゝある彼等の民族的抗爭手段の大前提として國際聯盟は無力乍らも存続を保證せられてゐる譯である。國際聯盟によりて正しく白色の對有色世界征服は遂行の假定を有してゐるのである。

斯くの如く、俗權によりて支配されつゝある國際聯盟が、果して眞の超國家的權力を行使し得るであらうか、かくの如く手段化されたる國際聯盟を破棄する事によつて、吾軍國に生を享くる者は白の世界征服に對し一意反逆の矛を握るべき大使命ある事を自覺せねばならぬ。そは世界の大なる攪亂者平和の破壊者としての矛ではなく、白の世界征服に對

する有色奴隸解放の叫びである。

三

世界大戰以後地球の檣舞臺に現れた二大脅威國は正しくソビエトロシアと亞米利加合衆國である。社會主義的國家と資本主義的國家としての兩國は然し乍らその世界征服策に於て一致點を見出してゐる。ソビエトロシアに就ては言及の資格なき故に之も避け凡ゆる街頭に演説に商賣の種を與へてくれる亞米利加脅威國に就て一言せねばならない。

吾人は民族生活若しくは國家生活に於て歴史を無視するだけの超歴史的人材ではない、その人の現在を知り未來の動行を知らんと欲せば先づその人の過去を見よ、世界を脅威するアメリカニズムの現状を知り未來への洞見をなす爲には少くともアメリカそれ自体の過去を眺めねばならぬ。

産業革命の大渦中に投ぜられた英國が、資本主義國として世界の大海に舟出した時、經濟機構の基に彼の取れる政策は對外的には即ちかのメルカンテイリスムスであつたのである。此の政策よりして考ふるならば、全植民地は唯一自己の屬する本國の利益の爲に存在し、本國の利益の爲に援助犠牲は拂ふとも、本國との生産若しくは市場の競走は斷じて本國の許さざる所である。唯本國に缺除せる原料若しくは商品の供給により本國を富裕ならしむる以外の義務を有するものではなかつたのである。英本國に於けるブルジョアジーの發展成功に伴ひ、必然的過程として發生したる右の如き考へこそ、そしてその實現としての政策こそ正しくアメリカ革命の大真髓に横はる論理であらうかと思ふ。

各國の歴史をばしばし眺める時吾人は其處に容易ならざるものを發見し得る。そは何か？ 他ではない、歴史は欺瞞者であると云ふ事である。幾千年と積る人類の歴史に嫌惡すべき或は憧憬すべき幾多の事實が憧憬されたる、或は嫌惡された時代の裏面に動搖してゐると云ふ事である。歴史はかかる眞在をば吾々に隱蔽してゐる。

アメリカは自然的富源に恵まれ、且小數ブルジョア白人に支配されてゐた關係上當然興るは資本主義國家に外ならないのである。併し一つの資本主義がその發展段階に上るには尙幾多の違反が存するのであるが、かかる束縛を縦横に切り廻す能力をも要せず、又それを要する反對者をも發見し得ずして、現在の資本主義國家の基礎をなせる革命當時のアメリカには幾多の飛躍された背理が存在してゐねばならぬ、歴史はそれを吾人に隠すのである。

史家ウンターマンは右の事實を指して叫ぶのである、併も例の紳士の口調を弄して……之の埋れた歴史は米國獨立宣言當時彼の雄辯なる政治家が勞働者に對する演説に於て言ひ忘れた所のものである……と。

人は理性的動物なりと常に某氏が云ふのであるが、凡ての人必ずしも皆理解能力五分五分の保有者とは斷定し難いのである、其處に如何なる陋劣なる手段も惡業に近い操縱も平氣で併も理解される事のなく行はれる事がある。操る者と操らるる者、宛も工場に於ける勞働者と機械の如く正しくその理解能力は異らねばならぬ、人間世界には常にかかる變差が存在し宇宙の契機は全く存續してゐると見るべきである、併し乍ら操る者は操らるるものに對して自己の目的の奈邊に存するかを言明するであらうか？

再び米國革命に於ける歴史の飛躍したる背理を拾はば、そこに操る者の爲の利益世界建設が明確に察知し得らるるのである。

ウンターマンは更に言葉を續けて……ヨーロッパより渡つて來た白人の家は煉瓦で作られ室の側板は金銀板で飾られ卓上には古代の贅澤品が山積されてゐた。ニグロ屬の僕婢等ほ彼等の用事をなす爲に群がり來つた、凡ての勞働は奴隸によつてなされ、白人は働く事を墮落だと思つた、そしてその主人は凡ゆる勞力の世界をさけ、唯客の接待と社會的政治的生活に浮身を擲してゐた……と、之の記述の中に何處にデモクラシイの誇りがあり得ようか、社會的には階級の別峻烈を極め僕婢は哀れむべき地位に沈んでゐ、且仲間の白人すらも勞働者へと變じた者は僕婢同等に計算したのであ

つた。更に彼等は單に上級の地位特權のみを掠奪してゐたのであるが、果して彼等自身に顧みて、永時侮辱し來れる奴隸勞動者は、彼等と同等なりと嘯く如き言辭が好ましき事であり得たであらうか？

「凡ての人は同權の基に生る」

併し社會的並に政治的地位特權を誇りそれを棄つるは劣か凡ゆる手段を弄して、それを確めんとする彼等移住紳士が、かかる宣言をなし得るであらうか、獨立宣言を書いた時彼等は已にあるものを企圖してゐたのである。それは政治家が右手に地盤協安の如く有權者を品物扱ひになしつゝ左手に諸君のお蔭でと回避する様なものの以外のものではない。社會的に政治的にそして又法律的に先天的に同權ならざりし人々に對し、且それを増々固定せんと計りし彼等がはずみにもかかる言葉を口にする者であらうか。そして結果として見ても彼等は宣言に提げられたる物は一物たりとも實行せずむしろ反對に、凡ての人を不平等にする爲に凡ての施設をなしたのである。

前述せる革命の原因メルカンチリスムスは何なる方面に革命的導火線を造つたであらうか？ 歴史の欺瞞はブルジョアジーによりてなされプロレタリアートに依つて暴露されて行くのである。それは即ちアメリカ植民地の住民は大多數革命原因に關係のなかつた事である。

例へば印紙條例を見るに、之は凡ての法文書、新聞、印刷物にイギリス政府發賣の印紙を貼布せねばならぬと云ふのである。併し乍ら植民地民衆は法文書には何等關心を有せず、且新聞、印刷物等は讀みもしなかつたし又讀みも得なかつたのである。

更に茶税を見よ、輸入茶消費者の大部は紳士であり、民衆は自國製を用ひ決してかかる贅澤物を用ふべき金錢は毛頭有しなかつたのである。

併し史學は義務上次の如く述ぶる「彼等民衆の使用せざる數種の物品に對する一年僅か數ペニーの税に就て狂氣の如く

なつた」と。或は曰く、「此の税は凡ての騒ぎを起す程、高價のものではなかつた。併るに民衆が反對したのは代表權なき所に課税の義務ありとした點である」と、併し大多數の民衆は代表權の何たる者なるをも知らず、革命成就後に於てすら與へられる事はなかつたが、求める事もしなかつたのである。

かゝる矛盾を心底深く藏し乍らヴァージニア洲會壇上より堂々英王を攻撃して紳士パトリックヘンリーは曰く、「我に自由を與へよ、然らずんば死を與へよ」と、實に千古の迷言である。更にまた、ボストン港に於て、茶を海中にツマミ込み鹽茶を湧かした世界の狂人は實に紳士の息子等である。若し勞働者にして、かゝる行爲を爲さんか、平和の攪亂者として投獄の嘲笑に起臥したであらう。

四

斯る人形師と人形によつて完成された人形芝居の國アメリカが、自己の有する操從的能力によつて世界を風靡せんと試みるの時代が現出したとしても、アメリカそれ自体に於ける國家統制は常に漂舟の危きを思はしむるは思ふに難しとせざる所である、無知なる多衆の存續する限り、彼の有する自己欺滿は論破攻撃さる事なしと雖も、一段學校制度の基に、その欺滿を知るだけの要素が侵澄された時、其處に現れ出た統一思想は所謂無統一と云ふ事であつたのである。かく多衆の知的進展により無統一の世相は現出したのであるが、獨立當時より存續せる資本家は互の利益の相寄る所に從ひ統一ある資本主義の國家体系に引ずらうとしてゐるのである。併し、無知ならざる多衆は最早その手はくわなの焼蛤を買ひ込んでゐると云ふ現狀なのである。

知ある多衆の知れる國体なるものは欺滿に滿ちた組織であつた、故に彼等にはアメリカそのものの存立は果して如何なるものであるかを知らず、唯厭世論者の國家を組織し嘲笑の生活を送りつゝ本能の動行に身を托すのみである。本能

の動行に身を托す、此即ち世界を脅威するアメリカニズムであり、バイロニック厭世論である。

併し乍ら世界の資本主義を自ら双肩に擔ひつゝ世界征服の野望を遂行しつゝある者は、米國そのものを形造る一部少數の經濟的利害によつて團結せる資本家である。此即ち世界の脅威經濟的帝國主義である。前者に就いては後に譲るとして后者に就いて一言せねばならない。

五

第二十世紀開幕するや、豊富なる内容に恵まれたアメリカ合衆國は、彼獨特の經營機構により莫大なる資本主義陣營を築き上げ、次に來るべき該世紀初期の世界大戰前夜には、已に世界第一の蓄財家となり了つてゐたのである。彼の資本家が幾年幾十年の間寸時たりとも忘却し得なかつた世界經濟の指導は、遂に好況にもかゝる氣運の中に激發したのである。一九一四年の世界大戰が、悠々せまらず六年間の長歲月に跨つて、野望の爲に戦ひ、遂に怠惰の情によつて閉戦の曉を見出すまでヨーロッパの凡ゆる生産機構は破壊せられ、食料品の不足を告ぐる時、そこに残されたる唯一の依頼はアメリカへの泣注文であつたのである。

世界大戰以前には大の資本輸入國であつたアメリカが大戦勃發の十四年には二十六億ダラーの資本を輸出し、更に幾多の資本を追加輸出して、遂にヨーロッパに於ける生産を指導し、ドーズプラン以后は、西歐の復興を援助し經濟的にも或は政治的にも、ヨーロッパを支配するに到り、此處に初めて彼等の野望は滿願の利益を受け一大債權國となり一大シヤイロツクとして世界への君臨が實現したのである。

ヤニングは云ふ、「世界大戰は米國帝國主義の第一歩を完成した。千八百九十八年に胚胎せる彼の帝國主義は千九百十四年に至つて曙光を發し出した。孤立と國際不干渉主義の夜は去つて、帝國主義霸權の日は昇つたのである……」と。

資本主義の勃興乃至回復は先づ第一に資本の存在を豫想する。併し乍ら世界大戰によつて死の直面にまでたゞきつけられた歐洲内部の資本主義は、單に擡頭の緒口を把握するだけの資本すらも有しなかつたのである。此處に歐洲内部には多くの社會主義進展を防止する必然的な契機は最早地を拂つて、一物をも殘留せず、勃興の儘に委されたのであつた。併るに思ひもよらぬ救世主は、曾つて歐洲を免れ去つた自由の子等より生れ出たのである。資本なき國に資本を供給し、或は生産の經營方法を教導し、或は合理化を唱導して、歐洲の資本主義をば兎も角もその破滅より救ひ出したものは、正しくアメリカであつた。

併し乍ら浮世の風は個体である。之の物質文明、資本主義の時代に於ては單なる溫情的な生優しい救助などは全くあり得よう筈がない。救助は支配であり征服である。此處にアメリカの「ヨーロッパ征服」が云へる譯である。

アメリカは自己の包含する資源によつて、完全に世界の舊統國を征服した、それと同時に世界文明の轉遷期が到達したのである。物質文明の世界に於ては、凡ゆる人間生命の希求して止まぬものは所謂物質であるが、それに平行して、各生命は資本家の行動を以て理想とする心中の飛躍的羨望を持つものである。國際的ブルジョアに對する世界のブルジョアは物まね猿の如く、アメリカの文化に憧憬しつゝある。曾つてのイギリス及びフランスが世界のブルジョアとして有し、且世界を支配した輝然たる文明の明星は、その資本主義變形の後に於ては正しくアメリカによつて代らるべき運命を持つものである、一つの文明の没落は他の一つの文明の生誕である、かくして生誕したる文明は、前述せる如く、人間本能の必然的情趣に出發し、漸く世界に普及浸潤の動向を辿りつゝあるのである。

一つのは生と同時に死を内部に包含する。一つの文明の生は必ずや死を有するものである。併し乍らその文明に生活する生命は、そのものの内部に存在する矛盾を知覺するだけの反省は加へないのである。

太平洋の怒濤を超えて海里幾百千、世界を脅威するアメリカニズムの波は先づ太平洋岸の日本を打つ。

盲従か？ 屈従か？ 奴隸か？ 猿人か？

反逆なき所進歩なし、進歩は常に反逆より生じ、盲従は進歩の敵である。舊統に傳せられたる日本は一体何處へ行かねばならぬのか、死か生か、沈滞と不安の日本、一体日本はどうなるのか。

六

現代日本を横行する怪物二つあり。

一者は徹底的平和裡の破壊をなすものであり、他者は革命的戰闘裡の破壊をなすものである。前者は即ちアメリカニズムであり、後者は即ちマルキシズムである。二者は何處までも對立的であり、一方がテージスであれば他はアンティテージスである。拜金宗に立脚せるアメリカニズムとマルキシズムが世界の大波亂を卷き起すであらうと云はれてゐるのに之の現代に於ては餘りにも小なる島國日本に於て、時を同じうして、兩つながら受容してゐるからたまらない。世界の動向は正しく日本の動向であり、世界の未來は正しく日本の未來である。永き歴史と傳統の中に、儒教は支那に生れて日本に育ち、佛陀は印度に生れて日本に育つ。明治法制の制定も已に日本化され溶合されたものと自負した日本人が、今や時を同じうして二つの矛盾概念に接觸したる時、如何に溶合力を有しておらうとも、果して之を溶合し得る者であらうか、矛盾する二つの概念の融合は要するに二者それ自体の對立であらねばならぬ。歐州諸國に於ける各政策は彼獨特の分析的知識傾向を以て二者の對立を要求し、その一に與しつゝ他の排撃を試みるか或はそのまゝ、二元的國家形體を許容するかに存してゐるのである。併し乍ら我日本に於ては、融合と云ふ自負により、鵜飲に之を許容してしまつた以上、且又二元的國家形體の許されざる以上、一に與する以外ではあり得ない、かくして選ばれたるその一者は、資本主義としての國家組織に外ならぬ。併し乍ら更に眺め行く時、其處に吾人は、更に再び大なる拒否に到達するので

ある。

對外的に之を一言すれば、世界の資本主義國家の正義となす概念とは全く別個の世界に孤別されたる正義が吾日本に存すると云ふ事であり、更に國內的に見れば、資本主義の立脚者により必然的に探及さるゝ享樂主義なるものが之亦建國の精神に反すると云ふ事である。而して孤別されたる正義と、建國の精神とが一にして同一なる概念なる故に、選ばれたる一者との拒否概念が儼然として此處に存してゐると云つても敢へて過言ではないと思ふ。

貰ふ物は夏も小袖式に、無暗と貰ひたがるのが日本人である。一人の人が貪欲飽くなき資本主義でふタコと、營養不良の社會主義でふ梅干とを同時に食つてしまつた。その人は食つた兩者を融合しやうとすれば、それは喰合物であるが故に、死を豫想するであらうし、少しの苦痛を忍んでも吐いてしまはねばその体がもてないであらう。その人を稱して吾々は日本人だと云ふのである。併して、物質文明の世界に於て彼は、未來に於ける死てふ大なる苦痛より、現在の一瞬に於ける吐出てふ小なる苦痛に重きをおく、之も亦日本の傾向である。

斯る中毒物を無意識的にでも食つたと云ふ事は、その人自身の個体の維持についての意識を等閑にした爲に外ならないのである。その個体とは即ち日本であり、維持方法は即ち建國の精神、換言して、國民精神である、

二者の對立は勝つか負くるか、決定的の判決下に置かるる物であるが、現代日本に於ける三者對立は永遠の流轉である、かかる雰圍氣の中に將來の日本は發展するのも知れない。併し吾々は、無能の然らしむる所か、未だそれを了解する事は出来ないものである。國民精神の忘却、凡ては此が大なる原因を成してゐる。外部的對立に世界を脅威せる吾日本國民性は、内部的に甚だその力の薄弱さを見るのである、宛も寒天に威を振ふ氷が、柔軟極まりなき温水の僅かによつて、苦もなく溶解する如く、之の地からほゞむり去られるのではなからうか、併して之の個体が死滅した時、タコも梅干も同時にその鬭争を止めて死滅し、その肉は狼の牙慾に食ひさかれるのではなからうか、それは即ち西にあるソビ

エツト、東にあるアメリカへの、日本民族奴隸を意味する以外のものでは斷じてあり得ないのである。

七

「日本は神國」

右は現代日本の無統一状態を救はんとする思想善導の標語であると拜聞するのである。併し乍らその意を解するもの亦極めて無思想的である。神は物ではない、心の所産である。即ち精神と相通するものである。現下物質文明の世界に精神的な言葉を以て一國の思想が苦もなく善導されよう筈はない。それは正しく、何の反響もなく、言及して見たとて水掛論に終らざるを得ないと云はねばならぬ。總てのものを理論に立脚して考及せんとする青年に對して、紙札上の數個の文字が、善導の責を全うするとは思へないのである。目を追ふて代る世の姿は、單にモダンガールの衣裳のみではない、此處十數年間に變化せる日本の姿は、それ以前の人の餘程の努力をも必要としてゐたのである。物質文明は完全に日本をも征服してゐる事を常に念頭に置いて貰ひたいのである。

「建國の古に歸れ」

右は國粹黨の諸君が常に口にする標語である。神武天皇の古に歸れと云ふのであるが、吾々はその方法を發見するに苦しむものである。且又神武天皇の御世が如何なる生活様式であり、如何なる國家形体を備へてゐたものであるか、神話による以外には明確にその認識を把握する事が出来ないのである。

吾々にかかる漠然たる世界に歸るの必要はない。時恰も昭和！吾々は「建國の精神に目醒めよ」と云はねばならぬと思ふ。それは現代より未來にかけて、等閑に付されたるまた付されんとする國民精神である。資本家が利慾に汲と々して片方に享樂を追ひ、無産者が之に對抗して正義の叫びを上げてゐるのも、皆國民精神の保護の基に於てである。往時の

國民精神は凡て建國の精神であつたのであるが、今やその精神は一部のものに殘存するにすぎず。斯る精神を他所にして利慾の奴隸と化したる現代日本人により遺憾なく破壊されつゝあるのである。それが曾つては歐州文明によつて打撃を受け、今日に於ては所謂アメリカニズムによつて徹底的と云ふ位に破壊されたのであつた。口に建國の精神を説く者あれど、その人の心理を鏡に寫す事が可能であるならば其處に浮び出づる漠然たる影像是正しくアメリカニズムに外ならないのである。

世界の大海に乗り出した日本人の目に先づ第一に映じたるものは海外文化であつた。かかる結果として滔々と押寄せて來る外來文化に對して、日本固有の文化は、一も二もなく消滅したのである。何故ならば、日本の百姓娘に比してパリージャンヌやヤンキーガールは龜と月位の崇高美を持つてゐたから。

カフエーが汎濫する、ジャズが響く、ダンスが狂ふ。可笑な事であるが、此のスクリーンに儒學者を立たしめて、一場の説教をやらしたら恐らく一錢を與へられて追出されると思ふ。

正しく之の場に於ては儒教は一錢の價值しかないのであるから。我々は他の武器を拾つて之に抗爭せねばならなくなつたのである。

シンミイやジャズやターキートロット、或はカフエー之を辯護する人々(三者の一人)は、それが資本主義文明によつて抑壓され搾取されたる、憤怒に對しての安全瓣であり、且その憤怒が求むる他の手段より、民族的に有害の度が少いと云ふのである。正しく左傾たるよりは放蕩兒たれと云ふのである。作し乍ら之が憤怒を収むる手段とならずして反つて憤怒を増加し、他の手段に訴へせしめると云ひ得るのである。資本主義そのものが社會主義をして敢て革命の矛を握らしむる契機は、かかる反抗の感情に常に存してゐるのである。社會主義運動が日本に成立すべからずとすれば當然資本主義形體も成立しないと云はなねばならぬ。社會革命運動が凡ゆる危害を受けねばならぬならば、ジャズやレヴュー

も同様の危害を加へねばならぬ。之が即ち吾等の見方である。

否定として生れ来る社會主義革命運動を彈壓する前に、宜しく肯定たる非人道的資本主義運動を禁抑すべきである、そして其處に残されたる一者は、必然的に建國の精神たるを疑はないのである。

外部には經濟的利害に急なる列強より牙劍をつきつけられ、内部にはアメリカニズムと戰はねばならない。正に日本は混沌である。併も世界は？

唯物論的文明が世界を支配するに至つて再び混沌と化して行つた。米國の經濟力に依存する事が自己の生命である國々は永久に米國の奴隸であらうし、奴隸たらざらんと欲する者は宜しく反抗するであらう。歐洲を足下に伏させた米國がその目を注ぐ所は極東の地である、併し其處には日本が存在する。彼等の野望をたたきつけ、國民の安寧を保證する國の守りがある。世界は物欲の爲に分裂し、世界は民族抗爭の時代となつたのである。

八

我々は漸く結論に到達せんとしてゐるのである。物質文明の寵兒資本主義と社會主義とが、互の本陣に依つて抗爭せんとする時代と更に又他の一方に、かゝる國際主義に反對の立場をとる愛國運動が擡頭するに當り、世界は巴の混亂を呈し、その結果として漸く世界は分裂し、民族抗爭の時代が現出したのである。一にファッショ、二にファッショ、愛國運動の行途には資本主義も、社會主義も、自己自身の舊巢へと退却せざるを得なくなり、經濟は生活の爲の經濟へと化しつゝあるのである。

世界平和の統治下に於ては凡ゆる國は平和であらねばならぬ。世界平和は各民族、各國家の平和の總和である。各人が世界平和に貢獻するの唯一の方法は、その民族の平和であらねばならぬ。自己の民族の平和をすて、世界平和を高唱

する者あらば、それは飛躍せる論理過程を通つた、空虚なる存在である。現實なる問題は民族の平和である。世界平和は一個の理想である事は言を待たない。理想はどこまでも持し續くべきである。併し乍ら理想に到達せんとすればする程、吾々は増々は現實を把握せねばならない。現實なる問題を忘却して吾々は如何なる理想へも到達する事は絶對的な不可能事と云ふも敢て過言ではないのである。世界平和の理想に進出し、貢獻する迄の近道は、自己民族そのものゝ平和であるべきである。

國家主義擡頭の曉、國際主義の殘月は、淡くも解消の運命を辿りつゝあるのである。此の曉の時代に於て世界の單位となるべきものは、個人の存在に非ずして、民族それ自体である。過去の民族自決が一民族一國家の理想を前提とせる裏面には、同一統治下にある二個の民族すら、融合し難き偏見を有すると云ふ眞理が、濃厚に含蓄されてゐるのである。各民族の平和安寧が飽滿の度に達した時、其處には何らの偏見もなく世界平和の理想が書き出される時であらう。飽滿の度に達せざる限り、併し乍ら、遺憾にも民族の偏見は必然性を備へざるを得ない、而して一民族が飽和の平和に達せんには、畢竟他民族の犠牲を要求するが如き、斯かる時代には、世界平和は増々以て遠き一個の理想に止り、現實は何處までも、民族の平和を前提としたる民族と民族の抗争であらねばならぬ。

併し乍ら、吾々は次の疑問に到達する、即ち、民族の單位は個人に非ずや、と云ふ事である。更に問ふ、各個人の單位は何者ぞ、此が即ち、唯物論への分析的自然科学の結論である、人と木石、同じく物に合致する、そしてその結果として生じたるものが、物質文明即ち國際主義である、唯物論的世界である。その方面の論述を少時避けねばならぬが、唯物的に單位を求める事によつて唯物論は偏せりの誹謗を受け、個人を單位とする事によつて、エゴイズムは否定されそして最後に民族を單位とする事によりて、民族主義は偏見の目を向けらるゝ。併し乍ら最後者は即ち他の民族主義よりの偏見であると思得られねばならぬ、數の單位は一である、世界の單位は民族である、一の單位は〇、一である。だ

が數の單位は〇、一ではあり得ない、民族の單位は個人である。だが世界の單位は民族を飛躍しての個人ではない、正しく民族そのものに外ならないのである。

民族の幸福は所謂最大多數の最大幸福である、此のものの中には常にある部分が犠牲に供さるべき事を前提とする。併し乍らその犠牲は單に同時代の犠牲でなく、過去未來に於ける尊き犠牲であらねばならね、而して共に幸福なる生活に生くる個人は、常にその生活が、かゝる重き犠牲に依存してゐる事を自覺してゐねば駄目なのである。

最大多數の最大幸福は、その犠牲が未來への基礎付けをなす以上、現代より未來への時間的範圍を有せねばならぬ。

崇高なる民族の犠牲、徳川幕府の墮落せる社會に反逆して、若き血潮を流水に注ぎたる明治維新の志士は、現代日本を作り出す爲の崇高なる犠牲に非ざるか。日露戰役に、北滿の原野に眠る五萬の英靈は、現代日本を作り出す爲の崇高なる犠牲に非ざるか。乃至は、滿洲事變、上海事變に、あたら敵彈に斃れし吾同胞は、現代より未來への日本を建造せんとする尊き犠牲に非ざるか。

再び云ふ。吾々の生活凡ては、此等崇高なる同胞の犠牲によりて支持されてゐる事を各人常に自覺しておくべきである。そして吾々の生活が、斯かる犠牲への尊き感謝に充ちた時、初めて、日本民族の平和は確立され、そして其處には社會主義も、資本主義も、勿論アメリカニズムも、その姿を消すであらう事を信じて止まぬものである。之こそ眞の日本の姿であり、その感謝こそ正しく大和島根の道であり、建國の精神であり、大和魂である。

九

併し乍ら、舊統を墨守せる支配階級が、優柔不斷の過程に晏如せる間に、又は大部鎔を以て塗られてしまつた。私は今度の冬休みに家に歸る汽車の中で、遂に恐るべき一大事實を拜聞したのである。語る者は上海事變に出征した、陸奥

艦乗組陸戦隊の一水兵であつた。彼は次の如く慷慨の瞳を見張つて私に、新聞紙の欺瞞を暴露してくれたのである。

「開北の戦は實にひどかつたです。私の友人も其處で遂に斃れてしまつたのですが……吳淞鎮の攻撃では、一人の支那兵が、最後まで戦つて退きませんでした。併しその兵がどうなつたか私は全く知りません。恐らく戦場の空氣に、巻き込まれてしまつたでせう。何と云つても、戦となると妙に殺氣立ちますからなあ……」。

それから事變も大部進行して、二月のあの廟江鎮の戦争でした。大村の兵隊が中堅で戦つてゐましたが、あの時私達は救助班に入つてゐました。死体の收容が一番つらいのですが、あのあたりには、あつちにも、こつちにも、何十人と云ふ、なつかしい、軍服の兵隊が、最後まで、銃を抱いて倒れとつたです。

或鐵砲の先には、〇〇隊何名戦死と書き記したのもあり、將校が、軍刀を杖に、半ば起き上つて死んでゐたのもありました。

就中、あの爆彈三勇士の死んだ附近には、一番多くの兵隊が、死んでゐました。中には半切れのものもあつたです。彼は涙をながして更に語を續けて行く。私はその有様を聞くにつけ、全くもらい泣きをせざるを得なくなつた。

「一番初め、私達が上陸した時の思ひ出です。上るや否や戦争、母艦からも打ち、ボートの上には機關銃をならべつけて、上つて見れば更に後ろよりの追撃命令でした。

上海の地は、内地と異つて同じ様な建物が列んでゐるので、斥候に出ても歸り得ないのです、そして在留邦人はと云ふと、在郷軍人がかけつけて來たばかりで、他の人は何事だらうか位の顔で我々を見ておりました。在郷軍人の案内で斥候をしてゐましたが、どうも案内者の数が少なく、そしてその案内者も便衣隊に時々殺されるので、遂にその地理に通ずる事が出來ず、あれだけの戦死者を出したのが残念です。併し私の一番何時までたつても忘れる事の出來ない、うらみがあります、それは（名前はかくす）上海の地理によく通じ、私達位の年配で、然も体は選りすぐつて行つたあの學

校の生徒が、事變が起ると間もなく内地に歸つてしまつた事です。

或る賣笑婦は便衣隊の爲に彈藥を運んでゐた、或る女は、水も月百圓出さにやらんけん、と云うて我々にのましてくれなかつた。金が何です、之の場合金は何です。私達は金で替へがたい命を、何の報いらるゝ事もなくすてゐるではありませんか、死を覺悟して戦地に來た我等は、ほんとうにどなたの爲に戦ひに來たかわからなくなつてしまつたのです。間もなく早岐に着いた、彼は私に一枚の名刺を與へて佐世保行きへと下車したのである。我々は内地のアメリカニズムに心酔する者に對して、一種反逆の矛を握りたくなつた。「要するに彼等は無智だからですよ」

かやように嘲笑する社會主義の諸君に活人劍を振ひたくなつた。

時已に遅しか、否定が肯定に對して常に鬭争を挑むが如く、肯定は否定に對して鬭争を挑む。だが肯定の力餘りにも弱きを惜むのみである、明にそれは時潮の流れに逆行するから。併し乍ら逆行せざれば世は貪慾の奴隸とならん。恐るべきは内部の解体である。

奴隸たらざらんと欲せば時代に逆行せよ。而して時代に逆行する者よ、無力をなげく事勿れ、彈壓をなげく事勿れ、入れられざるを絶望する事勿れ。

建國の精神でふ不朽の眞理が我々を庇護する限り、光明常に前途に横はり、成功亦近き將來にあり。